

本原稿は、2022年3月10日に開催した、京都大学図書館機構オープンアクセス推進事業（2016-2021）成果報告会「オープンアクセスによって広がる教育・研究の可能性」のミニ座談会を文字起こししたものです。

京都大学図書館機構オープンアクセス推進事業（2016-2021）成果報告会 「オープンアクセスによって広がる教育・研究の可能性」ミニ座談会

事務局「本日ご登壇の喜多先生、貴志先生と、附属図書館研究開発室の北村由美先生、図書館機構の松井啓之副機構長による、ミニ座談会です。様々な事例報告を通じ、オープンアクセスが教育や研究活動にもたらす可能性について、研究者の視点からお話をお願いします。ファシリテータは、北村先生です。よろしくお願いいたします。」

北村先生「ご紹介がありました京都大学附属図書館研究開発室の北村です。ミニ座談会のファシリテータということで、時間があまりございませんので簡単に質問をこちらでさせて頂いて登壇者の先生方にご回答いただき、その後に時間がありましたらお互いに質問していただくというような形で進めたいと思います。今回は、グッドプラクティスの紹介ということで先生方には具体的なお話をいただけて、それが非常に魅力だったと思います。KURENAIというのは膨大なデータを持っているデータベースになっていますので、どういう風に見えるのかというグッドプラクティスの紹介が多ければ多いほど活用されていくのだろうと思います。実際に使ってみて、また本日のビデオ講演での異なる事例を聞いていただいて、更にこういうことがしたいとか、こういう機能があればこういうことができるだろうとか、こういう人的サービスがあればこういうことをやりたい、という点が出てくるとと思いますので、それについてまず登壇者のお二人の先生からお話を伺えればと思います。ご登壇いただいた順番ということで喜多先生お願いできますでしょうか。」

喜多先生「私は教材についての話をさせていただきました。たくさんダウンロードされたのは、たまたま皆さんが欲しいものだったというだけのことかもしれませんが、オープンであることの意義とか意味ということをもっと広くシェアしていく必要があると思っています。つまり、お金がある人だけが学べる・お金がある人だけが研究できるということではない世の中にしていききたいな、ということです。たまたまですが私の教材と並行して話題に上の

が、同じPythonの教材で東大の教材とか、機械学習の教材で東工大の教材とか、ホットな分野だということもありますが、こういう動きが出てきたらいいと思います。

ただ教材を作るにはそこに至るまでの作るプロセスが結構大変ですので、ただ公開するプラットフォームだけというのは、なかなか辛いかなと思っています。」

北村先生「ありがとうございます。それは公開するプラットフォームだけではなく、そこに至るプロセスをサポートできる体制があればいいなということでもよろしいでしょうか？」

喜多先生「はい。たまたま、Wordの使い方を教える別の科目で範を示そうと思い、一所懸命作成したテンプレートを流用したということもありますが、本来ならそういうところは研究者や教員がやる仕事の外側かなと思っています。」

北村先生「ありがとうございます。続きまして、貴志先生、お願いできますでしょうか。」

貴志先生「私のほうからは、貴重資料デジタルアーカイブの構築事例という立場からお話をさせていただきます。今回、附属図書館から発信できたということの意味が非常に大きかったと思っています。図書館から運用上のサポートを受けることができたということで、大変効率的にシステム構築ができました。その結果、京都大学としてのネームバリューを借りつつ、世界から信用を得ることができたという風に思っています。一研究所だけではなく学内にあるいろいろな機関が連携していくということの意味を今回痛感したわけです。何より昨今は、グッドプラクティスの提示が重要視されています。データベースを構築するというムーブメントから、どういう風に研究利用するかという時代に移っています。ウェブ上に公開されている様々なデータベースをどのように研究や教育に利用したらいいのかということは、まだ試行錯誤の段階だと思います。私どもの試みも、学際的な応用性を狙った試みのひとつであったとお考え下さい。そういった点では、色々な事例研究がこうした場で発表されていくことを望んでいます。」

北村先生「ありがとうございました。それでは続きまして、松井先生も含めまして、3人の先生方にお伺いします。最初の機構長の挨拶にもありましたように、公開が進めば進むほど機関を超えた連携がしやすくなるであろうし、また、連携しやすくなって欲しいということがあります。その際、機関を超えて一緒に取り組むべきこと、もしくは分担するということ

について、それぞれの先生方の分野やご経験から、今後に向けてできることについてお話しただけだと思います。喜多先生、貴志先生、松井先生の順にお願いできればと思います。機関を超えてという意味は、学内の機関連携ということもあるでしょうし、学外機関との連携ということもあるかと思います。では喜多先生お願いいたします。」

喜多先生「第二部の発表で取り挙げたEDUCAUSEのOpen Educational Resourcesのレポートでも、組織的に動けるのが今はまだ大学というユニットになってしまうことから、機関を超えたプラクティスは少なく、キャンパス内の活動に対してのプラクティスが多いです。一方で、学問分野と一緒に携わっている人というのは機関を超えて存在しているので、組織に横串を通して学問分野でコラボレーションすることと、一定のリソースがあることにより活動に取り組むことができるという組織・機関のロジックとを、どうすり合わせていくのかというのは悩ましい話だと思っています。」

北村先生「ありがとうございます。貴志先生、お願いできますでしょうか。」

貴志先生「経験上言えることは、それぞれの機関が自立しつつ、それぞれの責任でやっていくということが最も大事であろうということです。しかし、今回のような活動でいいますと、私ども人社系の研究者と情報学や図書館学との連携というものが欠かせません。そういったヒューマンリソースを、いかにそれぞれの組織で活用していくかが、最も重要なことだと思っています。そういった点で、技術という話が先行しがちですけど、本当に重要なのは、人間のネットワークだと思っています。」

北村先生「ありがとうございます。システムの構築ということと両輪で、貴志先生は人的ネットワークの方をさらに強調してくださったのですけれども、連携が必要になるということですね。それでは、松井先生、いかがでしょうか。」

松井先生「私は、図書館機構のオープンアクセス推進やKURENAIについての責任を持つ委員会に所属しています。本日の発表内容に関連する最終的な決定にも携わってきました。これまでの図書館というのは、アーカイブ、つまり貯めておくという役割が重視されてきました。その役割として将来にわたって伝えていくことが非常に大切でした。その後、内部に限定して公開していたものを積極的に公開するようになり、貯めていることだけで価値があ

った時代ではなくて、それをどういう風にして次の世代に伝えていくのかという中で、オープンアクセスというものが位置づけられました。

インターネットの時代で誰もがホームページを持ち、いろいろな組織が簡単に情報発信できるようになったのですが、それと同時に次は、そういうものが人に依存する、あるいは一時的なものであることが多くなっています。本日の発表で紹介されたように、データについてはDOIを付与することによって、また絵葉書の画像公開の事例紹介のように一つの研究所もしくはその中の先生が個人で公開しておられるようなものを、いかに組織的に長期にわたって公開を維持していくようにできるのかということが、図書館として非常に大切な役割です。そして公開したものに対して、より高い付加価値をつけていくことも大切な役割です。

例えば本日の発表で紹介された引用文献情報のオープン化や、IIIFによる公開画像の他機関との連携です。IIIFでの連携により、利用者からするとどこに資料があるか分からないけれど、実は複数の大学に分散しているものがあたかも一つの場所にあるように使えます。そういう技術と組み合わせることによって、多くの人に長期にわたり高い価値を与え続けていくことが、これからの図書館に必要な役割です。そういう役割のいくつかの可能性というのが、本日、グッドプラクティスとして出てきたわけですね。

また、図書館がこれまで行ってきた、収集して置いておくというアーカイブの発想の延長では出てこなかった、新しい問題や課題もあります。例えば今日のご講演の中で喜多先生からご指摘があったように、公開した教科書の内容を訂正したい場合にどのように維持管理したらよいか、また、今後研究データを取り扱っていく際にデータの保守をどうしていくのか、などです。利用してもらうことを前提とするためには、公開コンテンツの維持管理が必要です。個人に依存しない組織的な維持管理の仕組みや、公開したコンテンツの価値を高めること、このような課題が、本日の第一部で報告したとおり、本事業を進める中でわかってきたことです。第4期の事業として、これらの課題に取り組むことによって、京都大学が維持管理しているものだから一緒に共用し、一緒に研究しましょうという連携にも繋がっていくと考えています。公開はしたけれど、すぐ見えなくなってしまったということは連携してもらえないですね。DOIの付与やその維持管理を、大学の事業として行うことが、連携の基盤にもなっていくと思います。図書館だけでなく、京都大学全体で取り組むべきことだと思います。

もう一つ補足すると、サーバーのディスク容量などの制約から出来ないことがあるとしても、本日の報告にあった、研究データへのDOI付与の事例のように、KURENAIは京都大

学全体の研究成果発信元への入り口であるということです。私は個人的には、KURENAIをブランド化したい。例えば、京都大学が生み出した研究成果には全てKURENAIブランドを付ける、オープンアクセス誌に掲載する論文にも全てKURENAIを商標登録のように付けるなど、KURENAIというサーバーの中に置いていないものであっても、京都大学として発信する研究成果には全てKURENAIブランドを付けます、という位の気持ちを持って発信していきたい。図書館は、その発信を、技術面、人的面からサポートしていければと思っています。」

北村先生「松井先生、ありがとうございます。組織的に実施することに意義がある、公開したコンテンツに付加価値を付ける段階に来ている、ということですね。この座談会のタイトルが<オープンアクセスからオープンサイエンスへ>となっているように、本日の西岡先生や今城先生のご発表の中で取り上げられた取り組みが、オープンサイエンスへの入口に繋がっているように思います。一方で、コンテンツの維持管理など、これまでとは異なる取り組みが必要となるだろうというご指摘を受けました。KURENAIブランドはなかなかいいですね。楽しいお話でした。

それでは最後に、座談会のタイトルが<オープンアクセスからオープンサイエンスへ>ということですので、これまでの先生方のお話の中にも様々なヒントがありましたが、もう一度オープンサイエンスに向けて先生方から一言ずつお話をいただければと思います。オープンサイエンスというのは、多様な捉え方ができる言葉だと思いますので、自由にご発言頂ければと思います。では喜多先生、お願いします。」

喜多先生「最初からオープンサイエンスという考え方で研究を始められるオープンサイエンスネイティブな若い人たちが、『このようにサイエンスしたい』と考えるところを起点にしてもいいと思います。どうしても私たちは今までやってきた研究方法を起点にどう変えていくかという形でしか発想できませんので、どのようにサイエンスするか、オープンサイエンスネイティブな人たちの発想で支えてほしいと思います。そのためには、松井先生も仰ったように、バックヤードを相当充実させないといけない。従来のように研究者が一人で取り組む時代ではないと思います。」

北村先生「ありがとうございます。では貴志先生お願いします。」

貴志先生「オープンサイエンスで最も心がけなければならないのは、分野に閉じこめるのを抑えることだと思います。理工系が作成して人社系が利用するというような従来型の考え方を捨て、学問分野を越えて取り組むことがオープンサイエンスの精神だと思います。こうしてはじめてストックしていた情報をフローできるようなアイデアや発想が出てくるとと思います。哲学的かもしれませんが、オープンサイエンスという言葉には、自分たちの学問の垣根をどのように取り払っていくかという超学際的な根本精神があるように思っております。」

北村先生「ありがとうございます。では松井先生いかがでしょうか。」

松井先生「オープンサイエンスという言葉には様々な解釈の仕方があります。つまり、閉じこもらず誰もが参加できる場という意味であったり、分野を越えて取り組むという意味であったり、様々な解釈できます。

『図書館は大学の心臓である』と言われた時代は、先程申し上げたとおり、図書館は過去の資料を蓄積していることが最も重要でした。しかし蓄積した資料には誰もがアクセスできるわけではなく、その大学の先生や一部の人間しか使えませんでした。そのような資料を広く公開すると、まず研究者間でネットワークができて学問が進みますし、次にアカデミックな世界に限らず、一般の人達もそこに参加できるようになります。

資料へのアクセスが飛躍的に高まり制約がなくなった時、再度私たちが考え直さなければならないのは、京都大学で働く研究者はどのような役割を果たすのかということです。これまで京都大学に属していれば、特権的に京都大学のリソースを活用して成果を出すことができましたが、資料が公開されればそのような特権は意味を失います。京都大学に属することで保っていた優位性がなくなる時、京都大学で学ぶあるいは京都大学で研究することの意義を、私たち個々人が再度問われることになります。

京都大学は社会全体に向けて資料を公開していくと同時に、京都大学の図書館は、あえて京都大学で学ぼう、あえて京都大学で研究しようとしている人たちに対して、プラスアルファでどういうことができるのかということ、今後の事業の中で考えていく必要があると考えています。」

北村先生「松井先生、ありがとうございました。時間になりましたので、この辺りでミニ座談会を終えたいと思います。学術情報流通の推進という言葉からイメージするものよりも、はるかに大きな、多様な渦巻きのようなものがあちらこちらで発生するきっかけになってい

るという印象を受けました。今日ご参加頂いている皆様と一緒に考えていくきっかけとなればと思います。座談会というよりは質疑応答のような形になりましたが、それではご登壇いただきまして先生方ありがとうございました。ミ二座談会はこれで終わります。」

京都大学図書館機構オープンアクセス推進事業（2016-2021）成果報告会
「オープンアクセスによって広がる教育・研究の可能性」実施概要

京都大学図書館機構は、オープンアクセス推進事業（2016-2021）成果報告会を開催します。

本報告会では、「オープンアクセスによって広がる教育・研究の可能性」と題し、オープンアクセス推進事業の意義と成果を報告するとともに、教育・研究における KURENAI やデジタルアーカイブの利活用について研究者の視点から紹介します。

図書館機構は、京都大学学術情報リポジトリ（KURENAI）による研究成果の公開と、京都大学貴重資料デジタルアーカイブによる古典籍資料の電子化・公開を2つの大きな柱として本事業を進めてきました。近年は研究データへの対応を進めています。KURENAI やデジタルアーカイブが、収録コンテンツの拡大に伴い、教育や研究に活用される事例が増えています。様々な事例報告を通じ、オープンアクセスが教育や研究活動にもたらす可能性について、研究者と図書館関係者がともに考える機会にしたいと思います。

1. 日時 : 2022年3月10日（木）10:30 - 12:00
2. 開催方法 : Zoom ミーティング（オンライン）開催
3. 主催 : 京都大学図書館機構オープンアクセス推進プロジェクト
4. プログラム :
 - 10:30 開会挨拶（引原 隆士 図書館機構長）
 - 10:35 第一部 オープンアクセス推進事業の意義と成果
（オープンアクセス推進プロジェクト）
 - 11:00 第二部 オープンアクセスによって広がる教育・研究の可能性
 - ① KURENAI からの教材の発信, その背景と課題:『プログラミング演習 Python 2019, 2021』を例に
（国際高等教育院／学術情報メディアセンター 喜多 一教授）
 - ② 人社系紀要のオープンサイテーションの試み:「京都大学大学院教育学研究科紀要」「人文學報」（※録画配信）
（附属図書館研究開発室 西岡 千文 助教）
 - ③ 図画像デジタルアーカイブ公開における IIF の衝撃 — ハーヴァード・イェンチン図書館、スタンフォード大学フーヴァー研究所との試みから
（東南アジア地域研究研究所 貴志 俊彦 教授）
 - ④ 研究データへの DOI 付与: KURENAI をランディングページとしてデータ使用状況を把握する（※録画配信）
（大学院理学研究科附属地磁気世界資料解析センター 今城 峻 助教）
 - 11:40 ミニ座談会 オープンアクセスからオープンサイエンスへ
（ファシリテータ: 附属図書館研究開発室 北村 由美 准教授）
 - 11:55 閉会挨拶（松井 啓之 図書館機構副機構長）
 - 12:00 閉会
5. 対象 : 本学構成員および大学図書館関係者
6. 参加申込 : <https://forms.gle/GQquUK8YjnhZNvKv9>
7. 参加定員 : 300名（申込先着順）
8. 参加費 : 無料
9. 申込締切 : 2022年3月9日（水）17:00
10. 問い合わせ : 京都大学図書館機構オープンアクセス推進事業プロジェクト
e-mail: oa-pt[at]mail2.adm.kyoto-u.ac.jp